

2023年1月22日顕現後第3主日

旧約聖書 アモス書 3章 1-8 節  
使徒書 コリントの信徒への手紙一 1章 10-17 節  
福音書 マタイによる福音書 4章 12-23 節

先週から使徒書が「コリントの信徒へ手紙一」となっています。本日は、パウロの書いたこの手紙から学んでみたいと思います。火曜日の聖書を学ぶ会でも昨年からのこの手紙に入り、今も学んでいます。

「コリントの信徒への手紙一」は、だいたい53～55年ごろ書かれたとされています。福音書の中で一番古いとされる「マルコによる福音書」の一般的推定成立時期より古い文書です。そして、イエス様の十字架と復活、言い換えれば、この世界に教会が誕生してから、まだ20年ぐらしか経過していない頃に書かれた手紙です。パウロがこの手紙を書いた理由は、自分が伝道旅行でコリントに設立した、できたばかりの教会（コリントの教会は誕生してまだ数年）に、様々な問題が起きたからです。パウロは、直接教会に行って、その問題の解決にあたれないので、手紙を書いたのです。コリントの教会の問題はいろいろあるのですが、本日の箇所、最初にパウロが話題にした事柄は、教会に発生した分派の問題です。私たちは、初代教会という存在を理想的に想像しがちですが、この手紙を読むと決してそうではなかったことがわかります。

本日の箇所の冒頭で、パウロは「**皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい**」（1コリ 1：10）と諭します。逆に考えれば、教会では勝手なことが主張され、仲たがいがあり、心も思いも一つではなくばらばらであったということです。また、「**実はあなたがたの間に争いがある**」ともありますので、結構深刻な状態のようです。そのようにことになった理由は洗礼でした。

12節に「**あなたがたはめいめい、『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケファに』『わたしはキリストに』**などと言いつついるとのことです」とあるのですが、「～につく」とあるのは、「～（派）に属する」と考えても「～から（教えを受けた）」とも考えられます。誰から指導を受け、そして誰から洗礼を受けたのか、その違いがそれ以上の意味を持つようになってしまったようです。この中のアポロは、パウロと同じようなイエス様の直接的な弟子ではない使徒といわれています。ケファは使徒ペトロのことです。キリストというのは解釈に困りますが、ひょっとするとイエス様から直接教えを受けたと主張する人がいたのかしれません。

パウロは、それらの主張に対して、「**キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか**」（1コリ 1：13）と問いかけます。この問いかけは、二つ大切なことを語っています。一つは、教える人は違っても、洗礼までが根拠となって分派が生まれてしまっただけでは、福音もイエス様の十字架も空しいと語っている点です。誰から教えを受けたのかという点

で違いが出てしまうのは、ないほうが良いのですが、人間の営みとしては仕方がないかもしれません。しかし、洗礼という儀礼にまでそのような違いが影響してはならないのです。もう一つは、「パウロの名によって洗礼を受けたのですか」とパウロが自分の名前を挙げて確認している点です。誰の名によって洗礼を受けたかと確認し、その問いの答えは書いてありませんが、「イエス様の名前によってでしょう」という答えを予期していると思われるからです。この時代、まだ「父と子と聖霊の名による」洗礼は成立していなかったと思いますが、おそらく「イエス様の名」による洗礼は、定まっていたのだと思います。

パウロは、洗礼までが分派の原因になることの愚かさを説明するために、15節では、「クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を受けなかったことを、わたしは神に感謝しています」とまで述べます。現代マスコミ風に「洗礼を受けなかったことを、わたしは神に感謝しています」という部分だけを切り取って報道すれば、「問題発言だ」と強く批判されそうですが、パウロはそんな批判があっても、自分にどんな批判があっても、十字架と復活の福音に立つ教会に、分派はあってはならないと主張したと思います。しかし、17節では、「もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を受けましたが、それ以外はだれにも授けた覚えはありません」と、すぐに矛盾するような発言をしています。ステファナの家の人たちとは、コリントのあるアカイア州で初めて洗礼を受けた人たちですので（1コリ16：15）、パウロの宣教活動として周知の事柄、非常に有名な出来事であったのでしょう。

パウロは、この箇所最後に「なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです」と述べます（1コリ1：17）。パウロがここで主張しているのは、自分が宣教したのは、洗礼をより多く授けるためではなく、福音を告げるためだと告げます。「福音」とは、直接的意味としては、イエス様が十字架にかかり復活されたことですが、そこから神と人との平和、人と人との平和が生まれ、この世界が主なる神様の御心にかなう世界に向って歩み始めます。「言葉の知恵」は、いろいろな意味に解釈できますが、「誰からの指導と洗礼が一番よいのか」などと考えることもそれに含まれると思います。一致と平和のための福音を告げられて洗礼を受け、そこから分派が生まれては、本末転倒です。

本日の箇所は、洗礼という罪の許しのための救いの儀礼ですら、誰から受けたかで違いがあり、そこから分派が生まれてしまう危険性を示しています。人間が考える違いは、今日でいう sacrament にまでも異なる方向性を持たせてしまうのです。そして、この問題は、今日の教会でもまだ解決されていません。しかし、だからこそ、わたしたちは、あらためて人間の価値観を超えた十字架を見つめることが大切なのです。敗北が勝利であり、弱さが強さであり、愚かさが賢さであることを示す十字架が大切なのです。大祭節はまだ先ですが、その十字架を見続ける教会、そしてその十字架を示す教会でありたいと思います。